

支援学級「FACT」からの報告

～不登校生徒Aとの出会いを通して学んだこと～

八尾市立大正中学校 海野 幹生

1. はじめに

「FACT」というのは本校の支援学級の呼称で、faculty, ability, capacity, という3つの単語と、それらを伸ばすという意味のtrainingの頭文字を取ってできました。4つの文字をつなげるとFACT、つまり、英語で「事実」という意味を表す単語と同じになったのです。

今から十数年前、当時のスタッフだった英語教師が考案し、校内での正式名称として採用されたそうです。

私がFACTの担任に就任したのは今から9年前ですが、在籍数は男子生徒3名でした。徐々に増えて現在は3クラス、男女あわせて15名の生徒がいます。個々の生徒の状況に応じた対応が要求され、その支援の形も多様になってはいますが、その中で、不登校、もしくは不登校気味の生徒への対応も、大きな課題のひとつとなってきています。現在、FACTには、そうした生徒が3名おり、集団になじみにくさを感じているため、彼らは、登校してもそのほとんどの時間をFACTで過ごしています。また、FACTのみならず、通常学級の中にも不登校や、欠席がちな生徒が目立ち、一昔前に比べると増えてきているように感じられます。彼らの多くは過去に起きた何らかの事象が原因でクラスや学年集団の中に入ることが大きなストレスとなり、次第にクラスや学校から遠のいていったと思われませんが、その原因は、小学校低学年頃や、幼稚園にまでさかのぼるケースもあります。しかし、本人が、その理由を口にするのではなく、家族も知らない場合が多いので、登校に導く手立てはそう簡単には見つかりません。彼らは私たちが想像する以上に、深く大きな傷を心に背負っており、それを克服するにはかなりの時間が必要なのだと思います。けれども私たちは、まずは学校に来てくれないことには、思うような指導や支援を行えません。そのためには各種相談機関や医療機関と連携、相談しながら見守っていくことが必要ですが、それに加え、学校の日常生活においてその子と、どんなにかかわりを作っていくか、どう向き合っていくのか、それを問われており、私たちの責任は大きいと感じています。

私がFACTで出会った、不登校生徒A。彼のケースは特異であったかもしれませんが、彼との出会いは、支援教育を実践するうえでの大切なことを教えてくれたような気がします。彼が大正中学校に在籍し、そしてFACTの仲間として過ごした3年間を振り返ってみたいと思います。

2. 入学式(Aとの出会い)

彼が入学したのは6年前です。こだわりが強いなどの自閉的傾向、広汎性発達障害の疑いがあり、対人関係にも困り感がありました。

小学校時代も、支援学級に在籍しており、登校が難しい生徒だと、小学校からの引継ぎで聞いていましたが、生活環境が変われば、登校するようになるのではないかと、軽く考えていました。しかし入学式当日、時間になっても登校せず、何度か家に電話を入れたのですが、母親も困っている状態で、結局、姿を見せたのは放課後で、母親と一緒に登校しました。制服を着るのも靴を履くのも嫌がり、素足にサンダル、半ズボンに半袖シャツ姿の少年でした。ちゃんと目を合わせてくれず、本人とはろくに会話ができませんでした。母親とだけ話をしましたが、翌日から欠席が続き、それ以来、姿を見せなくなりました。

3. 1年の体育大会(2度目の登校)

Aが学校に来て来なくても、こちら側からのかかわりだけは持ち続けようと、クラス担任とFACT担任の私が交替で、家庭訪問を行い、配布物などを届けに行きましたが、ドアすら開けてくれませんでした。次に彼が学校に姿を見せたのは2学期の体育大会の日。母親が付き添い、サンダル履きに短パンの少年の姿がありました。「参加しなくとも、仲間たちがどんなことをやってるのか、見るだけでも来てほしい。そのかわり他の誰にも見つからないよう、グラウンドが見下ろせる3階の教室を貸切にするから。」という、事前に取り付けた約束を果たしてくれました。でも、そんなに長い時間はいられないだろうと思っていたのに、律儀なことに閉会式が終わるまで、そこにいたのです。「本当は、学校に関心があるんだ、行事は結構好きなのかも。」という思いを持ち、来月にある文化祭にも来るよう誘いましたが、結局それ以来、姿を見せませんでした。

4. 2年生になって(不登校の日々)

2年生になっても登校することはなく、依然部屋にこもっていましたが、市の教育サポートセンターには、定期的に顔を見せているらしいことがわかりました。そこで、サポートセンターの担当者とも何度かお会いし、情報交換もしましたが、彼のケースは根が深く、時間もかかるので、このままのかかわり方を続けながら、見守るしかない、ということでした。本校にはスクールカウンセラーがいるのですが、母親との面談だけ行っていました。カウンセラーからは、「彼は母親依存が大きく、母子分離ができていない。でも、急いで、離すことは無理なので、ゆっくりと行う必要がある。」とアドバイスをもらいました。

その後も配布物などを家に届けました。母親が帰宅している遅い時間だと、母親の肩越しに、奥の部屋から半分顔を出す彼の顔を見ることができました。しかし、一人でいる時は相変わらず、ドアを開けてくれませんでした。そんな時は学校の様子を知らせたり、家での様子をおうかがう内容の手紙を書いてプリント類と一緒に郵便受けに入れておきました。

少しでも彼の興味を引こうと、イラストを入れたり、似顔絵を描いたりしていたのですが、後で母親から、「あの子は毎回、ちゃんと読んでましたよ。」と聞かされた時は、無駄な努力ではなかったんだと、少し報われた気がしました。

そのうち、母の留守中にもドアを開けてくれることもあるようになりました。その時は、本当にうれしく思いました。彼がやっと重かった心の扉を自らの手で開けたような気がしました。

あまりしゃべろうとはしませんでした。こちらの話はちゃんと聞いてくれていました。そのうち進展がみられるようになりました。家での様子を言葉少なげながらも、話してくれるようになったのです。一日、テレビを見て過ごしていること、ゲームをしていること、。今、はまっていることは、ガンブラ(ガンダムのプラモデル)だということ。手先が器用で、絵を描いたり、工作系が得意なことなど。

少しずつ彼の様子がわかってきました。家を訪れた時に、自分で描いたイラストや、短い作文を見せられることもありました。

そこで、私の担当教科が美術だったことから思いついたのは、「一人で無目的に描いても面白くないだろうから、こちらがお題を出して、次に訪れた時に見せてもらう。」という、やり取りです。たとえば、「最近作ったガンブラのスケッチを描いてみて。」というようなものです。

何度かやり取りに応じてくれましたが、こちらが熱心になりすぎると、プレッシャーを感じたのか居留守を使うようになってきて、また会えなくなってしまいました。

サポートセンターの担当者がおっしゃっていた、焦らず時間をかけてという言葉を思い出し、反省しました。

そして登校への兆しはないまま、2年生の終わりが近づいてきました。学年では、沖縄修学旅行に向けての取り組みが始まり、第二次大戦での沖縄戦や、平和についての学習が始まっていました。

1年の宿泊学習、2年のスキー学習に参加できなかった彼に、3年の修学旅行だけは参加させてやりたい、という願いも半ばあきらめかけていましたが、以前に彼が見せてくれた国際問題や戦争と平和についての作文を思い出し、平和学習で使っている資料の中から興味のあるものを選んで、少しずつ家のポストに忍ばせました。でも彼は顔を見せることはありませんでした。

後で聞くと、その頃は家に閉じこもりサポートセンターにも顔を見せなくなっていたそうです。

6. 3年生になって(3度目の登校)

とうとう3年になりましたが、3年になっても状況に変化はなく、5月の沖縄修学旅行にも行けずに終わってしまいました。結局、中学校に登校したのは、入学式の放課後と1年の体育大会の二日だけ。それもだれにも会わずに、こっそり校舎の窓から仲間の演技を最後まで観た思い出だけでした。

1学期も終わりに近づき、夏休みに入る頃には、何とか彼をみんなと一緒に卒業式に出させたいということが、私たちの目標になっていました。小学校の卒業式に出られなかった彼にとって、本校での卒業式が義務教育9年間の卒業になると思ったからです。「終わり良ければすべてよし」。そんなことわざに思いを託すしかありませんでした。でも、そのためには、卒業式までにたとえ少ない回数であれ登校でき、仲間たちと時間を共有しなければ、実現できないということもわかっていました。

夏休みが終わり、2学期が始まってしまうと、あっという間に年を越してしまう。その頃には3年生はもう高校受験、卒業後の進路に向けて加速します。私たちがAと関われる時間は限られているので、焦りもありましたが、どうすることもできないまま月日だけが流れ、最後の夏休みも終わってしまいました。

始業式の日の朝、Aのお母さんから学校に電話がありました。

「学校に行きたいというので、連れて行ってもいいですか？」

式が終わった放課後に母親に連れられ、Aが登校しました。少し見ない間に身長も体重もグンと成長し、おまけに数か月もの間、散髪屋に行っていないので髪は伸び放題。はじめは一瞬誰だか分かりませんでした。はだしにサンダル、短パンに半そで姿は、まさしくAでした。

本校では、9月に入ると体育大会の練習が6限目、7限目を使って毎日行われるのですが、母親と一緒に登校し、グラウンドの片隅で、みんなの練習を見守る日が続きました。

なぜ、突然「学校へ行きたい」と言い出したのか、お母さんにもわからないといいます。でも夏休み、家に引きこもっていた彼が、急に、「お祭りに連れて行って欲しい。」と言ったそうです。久しぶりに、人の集まる場所に出たAでしたが、そこで何人かの知り合いと出会ったのだそうです。帰り道、Aは母に一言「外に出られて、良かった…。」と、つぶやいたそうです。

やがて3年生の仲間たちも、グラウンドの隅で練習を見守るAの姿に気づき始めます。そのうち声をかける者も出てきました。体育大会当日、彼はクラスの仲間と二人三脚に出場することができました。2年前のこの日、校舎の3階から人知れず眺めていたグラウンドをAは仲間とともに駆け抜けました。

急に無理をして疲れたのか、体育大会が終わってからはしばらく学校を休んでいたのですが、このまま、また不登校になってしまうのではという不安をよそに、飛び飛びにはありますが、登校が始まりました。人と会うのを避け、みんなが登校し終わった後に登校し、午前中で帰ります。クラスへは行けず、FACT登校でした。でも、登校の回数が徐々に増えてきました。クラス集団に入れなくても、友達との交流を持てるよう、FACTの仲間との学活や、交流を工夫しました。暗かった彼の顔が明るくなり、声を上げて、笑うようになってきました。私も「Aは、3年生やからもうすぐ卒業やけど、学校のシステムは全くわかってないから、みんな教えたってな。」と、そんな冗談が言えるほど、彼にあまり気を使わなくても済むようになってきました。FACTの友達と仲良くなるにつれ、そのうち母は校門までの送り迎えだけで、学校に入らなくても、Aは一人で大丈夫になっていきました。いつかスクールカウンセラーが言っていた、「母子分離」の過程を見ることができたのです。

私も彼と色々なことを話し合えるようになってきました。次第に夢や将来のことも考えるようになり、何よりも、高校へ行きたいという目標を持つことができました。小、中学校と、十分に学校生活というものを体験してこれなかったAにとって、高校への進学は大きな夢であると同時に、大きな不安や大きな覚悟を伴うものであったと思います。

冬が近づく頃には、FACTの仲間とともに受験勉強をする姿が見られるようになりました。また、廊下や玄関ですれ違う3年生が、彼を見つけると声をかけてくれるようになりました。よく見ていると、いろいろなタイプの子が、親しそうに「久しぶり！」とか、「元気？」とか「来てたん？」などと声をかけます。真面目そうな子であったり、活発そうな子であったり、ひょうきんな子であったり、なかには女子もいます。彼は、うれしそうに「あいつ小学校の2年で同じクラスやってん。」とか、「あれは保育園の時よく遊んでた奴やねん。」とか、私に教えてくれます。ほんとに久しぶりの再会のような感じでした。そのうち、学活の時間や、家庭科など、自分からクラスのみんなどと授業を受けるようになりました。どうやらクラスに、好きな女の子ができたことが動機のようなのです。不純な動機があったのかもしれませんが。彼はホントに恵まれていました。2学期の終わりにFACTで開いた学級会。そこで、この1年を振り返って、自分の中で一番のビッグニュースは？と聞くと、彼は仲間の前で「学校に来れたことや。」と答えました。学校に来れなかった時はホントにつらかったそうです。一人ぼっちで毎日家にいると、おかしくなりそうだったと。幻聴を聞くこともあったそうです。幼い少年が、将来への不安、孤独、罪悪感、そんなものと一人闘っていたのかと思うと胸が痛みます。ではなぜ、学校へ来ようと思ったのか？私は一番聞きたかった質問をしました。すると彼はしばらく沈黙してから、「3・11かな…」と答えました。私たちは意味が分からず、「どういうこと？」と聞き返さずにはいらませんでした。分かったのはこういうことです。一人、部屋にこもり続けていた彼にとってはテレビが唯一、社会との接点だったのですが、その年の3月11日、この国が今だかつて経験したことのない大地震が起き、テレビ局は一斉に同じ映像を繰り返し放送しました。彼は、一日中、信じられないその映像を見続けていたのです。日本は今、大変なことになっている。平和な町を襲う巨大な津波、崩壊した原発、漏れ出した大量の放射能、大勢の被災地の人々、一瞬にしてすべてを失った人たち、子供たち、それを支援する日本中から集まった人々。そして、たくましく復興していく現地の様子。それらの生々しい映像をリアルタイムで数か月もの間、一人見続けていたAは、自分もこのままじゃだめだ、変わらなければ。こんなことしている場合じゃない。とりあえず外へ出なければという気になっていったのだそうです。

3学期に入ると定刻まで学校にいるようになりました。下校時間になると、急いで、校門の方へ走っていき、門から少し離れたところから、門を出ていく生徒たちを見送るのが彼の日課になりました。一通り出計らったところで、待たせてあった母の車に乗り込み帰っていきます。「自分もここにいるよ」ということを仲間にアピールしていたのかもしれませんが。登校し出してからAを見ていると、彼は誰よりも、学校の大切さ、友達の大切さを知っているのではないかという気さえしてきました。

受験も見事クリアし地元の私立高校への入学が決まりました。それは、彼にとって夢への

大きな第一歩であると同時に、これから待ち受けるたくさんのハードルを受け入れる決意と覚悟を余儀なくされるものでもありました。

卒業式。その晴れ舞台の日に、Aの姿がありました。もうサンダルに短パン姿ではありません。本校の制服に、短く刈った髪、白いスニーカー。夢への切符と引き換えに、幼少の頃から引きずっていた自分の「こだわり」と決別したかのように見えました。こうして彼はたくさんの仲間たちと一緒に本校を巣立っていきました。

母と校門を出ていく彼を見送る私にAは、お母さんに聞こえないように耳元でささやきました。「センス、俺な、あの子にメールアドレス、教えてもらったで一。」

私は彼に、2度目の「おめでとう」を言いました。私たちの知らない間に、中学生として、学校生活を積極的にエンジョイしていたのです。その時、私の心に浮かんだ言葉は「終わりよければすべてよし」でした。

あれから3年がたった平成27年3月の半ば、FACTの同窓会を企画しました。FACTの教室に集まった12名の仲間の中にAの姿もありました。もう立派な青年です。彼は高校を卒業したばかりで、専門学校に進学が決まっていました。歯科技工士になる学校だそうです。

私が「ガンブラで磨いた腕を生かせるなあ！」というと、彼は「ちがうねん、技工士の技術をガンブラに生かすねん！」と言って笑っていました。持ち前のユーモアのセンスにも磨きがかかっていました。

7. おわりに

Aとの出会いはいろんなことを教えてくれました。一番感じたことは、どの子も本当は学校へ行きたいんだということ、そして成長していけるんだということ。彼らを成長させるのは教師の力ではなく、仲間との関わりだということです。私たちは、子どもたちに、こうあってほしいとか、こんな力をつけさせてやりたいとかいろんなことを考えて子どもたちとかかわっていますが、必ずしも私たちの思い通りにならないことも多いです。しかし学校へ来ることで、彼らは確実に成長を遂げていきます。それは仲間の力だと思います。子どもは子どもたちとの関わりや、子どもたち集団の中でこそ大きく成長していきます。同年代の子らとの関わりや、交流の中でこそ、自分自身を見つめたり、将来を考えたりするのではないのでしょうか。そんなことを改めて実感させられました。私たち教師は、そのための環境づくりや、機会を工夫し、彼らが自分の力で成長していくための手助けをしながら、3年間を見守っていきたいです。それは彼らの長い人生の中のたった3年間ではありますが、きっと大切な節目の出会いだと思うからです。FACTにあった古いファイルに、支援学級にFACTという名前が命名された時の通信が見つかりました。A4のプリントで、おそらく全校生徒に配られたものだと思いますが、FACTの名前の説明のあとは、こう結ばれていました。

「FACTという単語には『事実』という意味があります。ここに私がいる事実、あなたがいる事実、そして今ここでみんなが出会えた事実、そんな事実を大切にしていきたいと思いま

す。」